

# 戸門に企業地 業炉廃

## し押し後 県・東電が 事故10年

# 業務を細分化 元請けと仲立ち

県や東京電力が、福島第一原発の廃炉作業への地元企業の参入を後押ししている。これまで地元企業にとって、原発関係の仕事への参入は簡単ではなかったが、初めて廃炉関係の仕事を受け負う会社が出始める一方、採算性や技術力に課題もあり、より丁寧なサポートを望む声がある。

「県内企業にとって、第一原発の廃炉に携わることには、少しでも早い廃炉の実現に貢献し、事故後失われた取引やビジネスチャンスをつぶすことにもつながる」と、楡葉町の「Jヴィレッジ」で先月30日、県などが開いた「マッチング会」。出席した県内企業21社を前に、県



マッチング会には福島第一の廃炉作業への参入を希望する県内企業21社の担当者が集まった。楡葉町の「Jヴィレッジ」。

の宮村安治・商工労働部長が参入の意義を強調した。その後は原子炉プラントメーカーなどが検討中の放射性廃棄物の保管容器などを紹介し、各企業と個別に商談した。

マッチング会は昨年12月に始まり、今回で3回目。福島第一の廃炉作業は30、40年掛かるとされ、廃炉費用は8兆円程度と見込まれる。地元への経済効果も期待される一方、地元企業は廃炉関連の仕事の経験が少なく、参入したいと思っても作業内容を知る機会さえ乏しかった。

し、廃炉に携わっている元請け企業との間を仲立ちするのが事務局の主な役割で、これまでに90を超え企業から相談を受けた。また、廃炉と言っても、核燃料を直接扱う作業から、重機の通行路の整備や資材の調達など作業は幅広い。東電は9月に作業の長期的な発注見通しを地元の実業家らに示し、双葉町商工会などに示し、地元企業が参入しやすくなるよう、作業を細かく分

## 受注側は発注額・教育へ要望

県や東電の取り組みを、地元企業はどう見ているのか。今野鉄工所（南相馬市）は昨年12月のマッチング会に出席し、福島第一のがれき保管容器の製造を請け負い、鋼材の溶接と塗装を担当している。震災前から福島第一の仕事に関心はあったが、受注は今回が初めて。

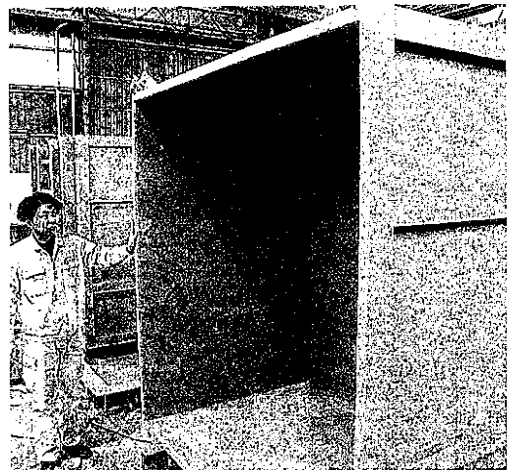
今野英邦社長（68）は「これまで東電の仕事はハードルが高いイメージだった。マッチング会の開催は隔世の感があった」と話す。

け、参入が期待される仕事を具体的に示した。東電福島第一廃炉推進カンパニーの高原一嘉バイスプレジデントは「福島第一の現場をある程度コントロールできるようなり、作業内容を計画できるようになってきた。地元企業に参入してもらい、復興を進めるなかで地域と共生できるようにしたい」と話す。

ただ、「発注額が想定より低く、（収支は）とんとん。来年は受注量を増やしたいという考えもあったが、来年も同じ（条件）なら難しい」と胸中は複雑だ。今野さんは「単に、地元企業に仕事を振るといって考えではいけないと思う」と指摘。地元企業が安心して仕事を続けられるよう、コスト面での配慮を求め

る。「地元を生かそうという方針は良いことだ」と取り組みを歓迎するのは、双葉町商工会長で、同町の建設会社・伊藤工務店社長の伊藤哲雄さん（66）だ。ただ、注文もある。「地元企業に最初から高いレベルを求められても難しい。本当に地元のことを思うなら、技術教育などもしてほしい」と求める。

双葉町商工会には160近い会員がいるが、事業再開したのはまだ約4割にとどまる。そのため、福島第一が立地し、いまま大半の地域に避難指示が出る双葉、大熊両町の企業が廃炉作業を優先的に受注できる仕組みが必要とも指摘する。伊藤さんは「（廃炉が完了して）最後に残るのは地元の人たち。その人たちが生活していける環境づくりをしてもらいたい」と語った。（福地慶太郎）



福島第一原発のがれきの一時保管容器の製造を受注した今野鉄工所の今野英邦社長。重さは約1トという容器はとても頑丈そうだ＝南相馬市原町区日の出町



双葉町商工会長で、同町の建設会社・伊藤工務店社長の伊藤哲雄さん。広野町上浅見川

迫る 探る

@福島